

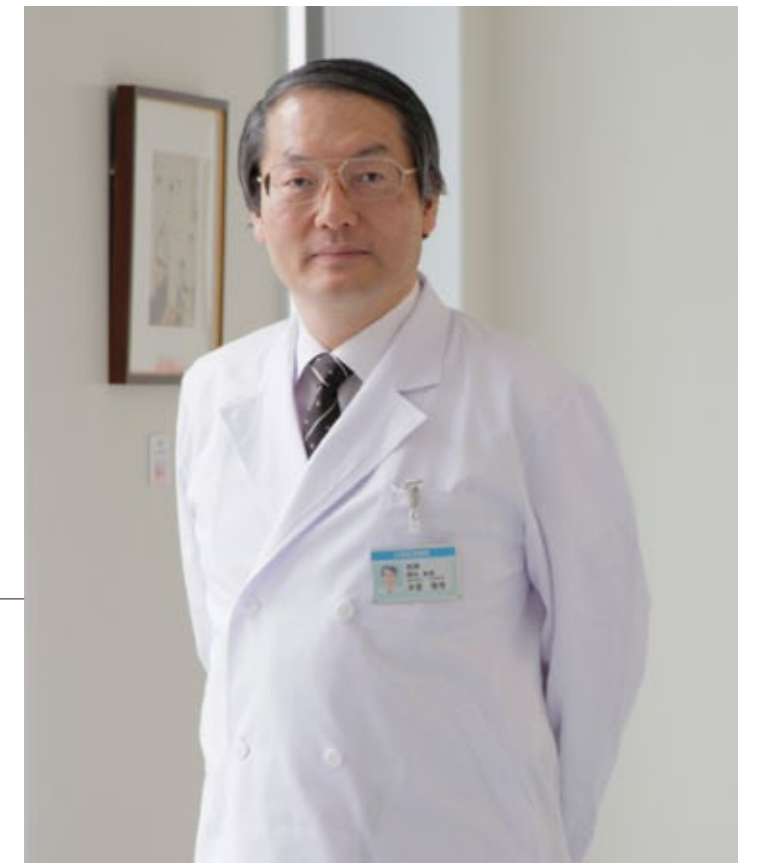
# Doctors White Paper

医師は「医師」であると同時にひとりの「人」である。  
多忙な日々の中で責任を全うし、  
かつ自分の人生を輝かせる秘訣は、  
その人のバイタリティにあり、とみた。

白内障患者を救う手術を  
日本から世界へ

## 患者に光を。

文/近藤ひでつぐ 写真/板津 亮



### 年間執刀数7000件以上

白内障患者の角膜を1・8ミリ切開し、水晶体の核を分割して吸引、すかさず人工レンズに入れ替える。その間、3〜4分。一般的な白内障手術と比べて時間は5分の1、創口は半分以下で、痛みもない。三井記念病院で眼科部長を務める赤星隆幸さんは21年前、この画期的な「フェイコ・プレチョップ法」を編み出した。

午前10時から午後4時まで約40人、1年間で7000人以上の手

術に追われる赤星さんだが、「数やスピードを競っているわけではない。追求しているのは完璧さ」と、あくまで慎重な姿勢を崩さない。その現場をよく知る医師は「まるで精密機械のようだ」と評す。

5分で弁当をかきこみ、夜まで外来、それから講演や手術の準備などを済ませて、家に帰り着くのはいつも深夜だ。

「いろんなしごらみがありますが、最新の設備と最高の技術で、患者さんにとって最善の治療をすることが僕の信念です」と話す赤星さんにとって手術は単に視力を回復させるためではない。「人生の活力を取り戻す」こと。そこに真の価値があると考えている。

### 技を世界に伝授

赤星さんは子どものころ、考古学者の祖父に連れられ、発掘や野外調査の現場に行く機会が多かったという。「教科書がすべてではない」「自分の頭で考えなさい」。祖父のそんな教えが、「画期的な手術法を生んだ源になっているのかもしれない」。

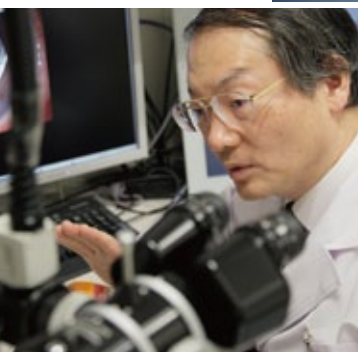
器具にも凝り、独自に改良に改良を重ねる。水晶体を分割するプレチョッパーもそのひとつだが、「名人芸であつてはならない。パテント料のせいで器具類が高額になったら、なかなか普及しない。ひとりでも多くの患者さんを助けたい」という願いから、特許はあえて申請していない。



赤星さんの視線の先にあるのは世界だ。各国の学会から招聘を受けて、学術講演や公開手術を行い、フェイコ・プレチョップ法のノウハウを惜しみなく伝授する。その際

も教えてあげて欲しい。フェイコ・プレチョップ法は、すでに60カ国以上に広がりを見せている。

人もいるのだという。赤星さんの夢は、白内障による失明の根絶だ。「夢を抱くこと。それに向けて全力で努力すること。真摯に努力を重ねれば、夢は必ず叶う」。その思いが赤星さんを動かしている。



1：赤星さんが開発した白内障手術用器具。プレチョッパー(写真下)で白濁した水晶体を4〜8個に分割し、吸引した後、インジェクター(写真上)を使って折りたたんだ直径6mmの人工レンズを1.8mmの創口から注入する 2：東京都千代田区にある三井記念病院。三井家総代の三井八郎右衛門が貧困者のために私財を投じ1906年に慈善病院として設立された。現在、病床数は482。年間8000件以上(関連施設例を含む)という白内障手術実績は日本一

### PROFILE

#### 赤星隆幸 Takayuki Akahoshi

1957年神奈川県横浜須賀生まれ。'82年自治医科大学卒業後、横浜市立市民病院、神奈川県立厚木病院で臨床を行ないながら、自治医科大学で眼科・解剖学の研究を続け、'86年に東京大学医学部付属病院入局。東京女子医科大学、武蔵野赤十字病院を経て、'91年から三井記念病院で勤務。翌'92年に眼科部長となり、現在に至る。